様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １３ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ２３０５７

研究課題名（和文）英語談話における学習者の指示表現産出メカニズムの解析：言語・非言語文脈情報の役割

研究課題名（英文）The Mechanism of L2 Learners' Production of Referring Expressions in Discourse: The Role of Linguistic and Non-Linguistic Contextual Information

研究代表者
宮尾　万理（Miyao, Mari）

立命館大学・産業社会学部・准教授

研究者番号：５０８５１００２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中級程度の英語習熟度をもつ日本人学習者が英語で談話を産出する際に、言語的文脈情報と非言語的（視覚的）文脈情報のどちらをもとにして指示対象の顕著度を測り、指示表現を選択するのかを調査した。絵画説明課題で産出された指示表現の形式（固有名詞・代名詞）を分析した結果、学習者は英語母語話者と同様に、言語的・非言語的情報の両方を用いて指示対象の顕著度を測り、それに見合う指示表現を選択できることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
学習者の指示表現使用に関する研究では、よく作文やストーリーリテリング課題が用いられる。しかし人によって指示表現産出前の文脈が異なるため、本研究では実験形式で文脈情報をコントロールした。これによって学習者が指示表現の選択時に使用する文脈情報の種類が明確になり、談話産出メカニズムの解明に一歩近づくことができた。また、学習者は談話と文法の情報統合が困難であるとするインターフェイス仮説への反証を示すことで、理論構築にも貢献した。

研究成果の概要（英文）：This study investigated whether intermediate-level Japanese learners of English use linguistic and/or non-linguistic (visual) contextual information to measure the salience of referents when producing referring expressions (REs) in English discourse. The forms of REs (proper names and pronouns) used in a picture narration task revealed that, like native English speakers, the learners have the ability to measure referent salience by utilizing both types of contextual information and select REs accordingly.

研究分野：第二言語習得

キーワード：指示表現　談話情報　英語学習者

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

談話の中で人物を指し示す際に、話し手は John などの固有名詞や he などの代名詞を用いる。しかし、談話のどの時点でどの表現形式を用いるべきかは文法で決まっていないため、話し手は適切だと感じるものをその都度選択しなければならない。母語話者は一般的に、指示対象が談話内で顕著であれば代名詞などの非明示的な表現を選択し、顕著度が下がれば名詞などの明示的な表現を選択する傾向がある。では、(1) 第二言語学習者は母語話者同様に、指示対象の文脈内での顕著度に合わせて指示表現を選択できるのだろうか。そうであれば、(2) 彼らはどのような文脈情報をもとに指示対象の顕著度を測るのだろうか。

(1) に関しては見解が分かれている。ほぼ母語話者レベルの学習者であっても、母語話者と異なる指示表現の解釈をしたと報告する研究がある一方で、Miyao（2018）の絵画説明課題では、中～上級の学習者であっても顕著度が低下した指示対象に名前を選択する傾向が見られたという。そこで、本研究課題は Miyao（2018）の実験材料を用いながら (2) の問いを追究した。

２．研究の目的

中級程度の英語習熟度をもつ日本人学習者が英語で談話を産出する際に、言語的文脈情報と非言語的（視覚的）文脈情報のどちらをもとにして指示対象の顕著度を測るのかを明らかにする。

３．研究の方法

Miyao（2018）は (1a–c) のような 3 文からなる談話を 35 話と、各文の内容を表す絵を 1 枚ずつ作成した。このサンプル談話では、Minnie が指示対象で Donald がコンペティター（指示対象と対になるような談話要素）である。

(1) a. Minnie went on a picnic with Donald.
　　b. And then, ___(Minnie/she took a picture of flowers)___.
　　c. A butterfly ___(was also in the picture)___.

1 文目は Minnie と Donald が描かれた絵と一緒にコンピューター画面上に呈示され、実験参加者はその文を音読した。その後、スペースバーを押すと 2 文目の「And then, _____.」およびカメラと写真を持っている Minnie と何も持っていない Donald が描かれた絵が呈示され、参加者は絵を見ながら英文を完成させた。さらにスペースバーを押すと、3 文目および蝶と花の写真が描かれた絵が呈示され、参加者は同じ要領で絵を見ながら英文を完成させた。

指示対象の顕著度はコンペティターが談話内に存在することで低下すると考えられているが、Miyao（2018）では (1a) でコンペティターを言語的に導入する（with Donald を文に入れる）と同時に視覚的にも導入していた（Donald を絵に入れた）。これではどちらの文脈情報によって指示対象の顕著度が低下するのかがわからないため、本研究では次の 4 条件で材料を呈示した。

(2) a. 言語情報なし、非言語情報なし（コンペティターの存在がわからない・存在しない）
　　b. 言語情報なし、非言語情報あり（コンペティターの存在が絵からわかる）
　　c. 言語情報あり、非言語情報なし（コンペティターの存在が with Donald からわかる）
　　d. 言語情報あり、非言語情報あり（コンペティターの存在が with Donald と絵からわかる）

どの文脈情報が指示対象の顕著度に影響を与えるかは、参加者が産出する指示表現から推測できる。2 文目 (1b) で名前を用いるか代名詞を用いるかが鍵となるが、もしコンペティターの言語情報のみが影響するのであれば、(2c) や (2d) の条件下で指示対象の顕著度が低下するため、名前の産出割合が (2a) や (2b) に比べて高くなるはずである。逆にコンペティターの非言語情報のみが影響する場合は、(2b) や (2d) での割合が (2a) や (2c) に比べて高くなるはずである。

なお、英語母語話者による談話産出では、言語的情報と非言語的情報の両方が指示表現の選択に影響を与えると報告されている（Fukumura et al., 2010)。

４．研究成果

(1) 指示表現の使用割合

各実験条件の 2 文目 (1b) で産出された名前の割合は図 1 のとおりである。混合効果ロジスティック回帰分析によると、言語的文脈と非言語的文脈の主効果がそれぞれ有意であった（$p = 0.003$, $p < 0.001$）。また、コンペティターの存在が言語的文脈と非言語的文脈の両方でわかる条件では、どちらかのみが与えられた条件よりも名前の割合が有意に高かった（$p = 0.009$）。

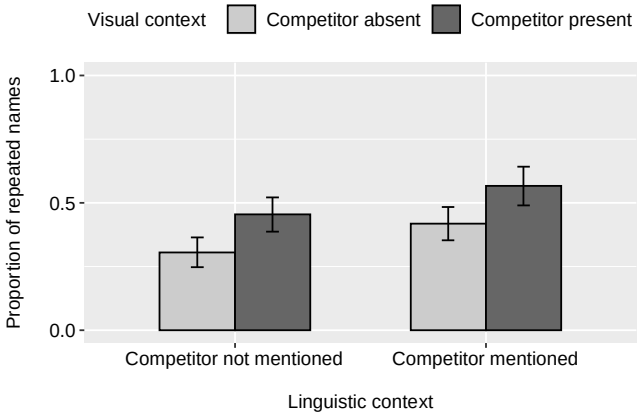

図 1．各実験条件における名前の産出割合

このことから、本研究の実験材料・方法を用いる限りでは、学習者は母語話者同様にコンペティターの言語的文脈情報と非言語的文脈情報の両方を使用して指示対象の顕著度を推測し、それに合わせて指示表現を選択すると言える。そしてそれらの情報が同時に与えられた場合、単独の時よりも指示対象の顕著度が低下すると考えられる。よって、「学習者は談話と文法の情報統合を母語話者同様に行うことは困難である」とするインターフェイス仮説（Sorace, 2011）を支持しない結果となった。

(2) 反応時間

次に、2 文目「And then, _____.」と 2 枚目の絵が画面上に呈示されてから参加者が指示表現（の最初の母音）を産出するまでの反応時間を測定した。各条件の平均時間は図 2 のとおりであるが、条件間で有意差は見られなかった。

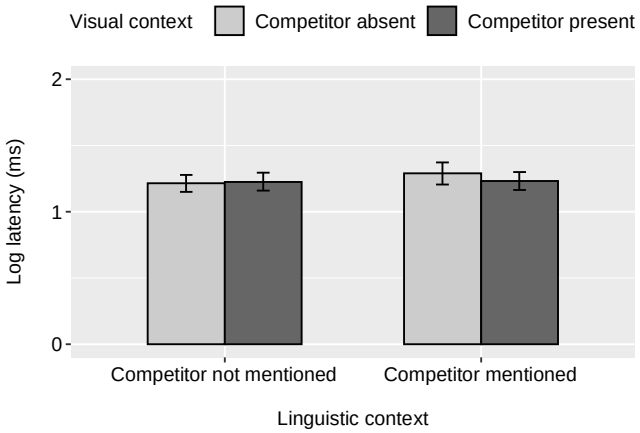

図 2．各実験条件における平均反応時間

英語母語話者を対象にした実験では、コンペティターが存在する条件で反応時間が増加した（Arnold & Griffin, 2007）。これは指示対象のみの条件に比べて処理的負荷がかかったためと思われる。しかし、学習者はそれ以外にも何らかの理由、例えば指示対象の動作をどのように英語で表現したらよいかを考える時間が必要であった等で、条件間の差が減少したのかもしれない。動作を表現しやすかった談話とそうでなかったものに分けて反応時間を調べるなど、今後詳しい分析が必要である。

＜引用文献＞

Arnold, J. E., & Griffin, Z. M. (2007). The effect of additional characters on choice of referring expression: Everyone counts. *Journal of Memory and Language*, *56*(4), 521–536.

Fukumura, K., van Gompel, R. P. G., & Pickering, M. J. (2010). The use of visual context during the production of referring expressions. *Quarterly Journal of Experimental Psychology*, *63*(9), 1700–1715.

Miyao, M. (2018). *The processing of referential expressions in discourse by Chinese, English, and Japanese native speakers and by Chinese and Japanese learners of English* (Publication No. 10757757). ProQuest Dissertations and Theses Global.

Sorace, A. (2011). Pinning down the concept of “interface” in bilingualism. *Linguistic Approaches to Bilingualism*, *1*(1), 1–33.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 Mari Miyao	４．巻 34
２．論文標題 L2 learners' use of linguistic and visual discourse information during the production of English referring expressions	５．発行年 2023年
３．雑誌名 Ritsumeikan Studies in Language and Culture	６．最初と最後の頁 119-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 Mari Miyao
２．発表標題 The use of linguistic and visual discourse information in the L2 production of referring expressions
３．学会等名 The 20th International Conference of the Japan Second Language Association（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 宮尾万理	４．発行年 2024年
２．出版社 晃洋書房	５．総ページ数 176
３．書名 英語学習者による指示表現の読解と産出 ―英・中・日本語の母語話者との比較から見える特徴―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関